

第2章 言語活動の充実を図る実践事例

1 各実践事例について

調査研究協力校で実践した国語・地理歴史・数学・理科・英語（専門教科）の5教科の実践事例を紹介します。第1章で述べたように、各調査研究協力校の年間を通じた校内授業研究のサイクルの中に、「言語活動の充実に焦点を当てた単元の授業実践」を2回設定しました。〔ステップ1〕では、1回目の単元で見いだされた課題と改善策をまとめてあります。〔ステップ2〕では、2回目の単元の内容、特に成果と課題及び改善策についてまとめてあります。

「1 単元指導計画」については、単元（題材）全体としての流れの中で、どのように授業を位置付けるかを考えて、作成しています（詳しくは、下のコラムをご覧ください）。〔ステップ3〕は、2回の言語活動の充実に焦点を当てた単元の授業実践から見いだされた年間指導計画作成の視点をまとめてあります。実践事例の概要は次のとおりです。

教科	科目	学年	調査研究協力校	詳細
国語	現代文	第2学年	横浜栄高等学校	7～12 ページ
地理歴史	世界史研究 (学校設定科目)	第3学年	横浜栄高等学校	13～18 ページ
数学	数学I	第1学年	舞岡高等学校	19～24 ページ
理科	物理I	第2学年	舞岡高等学校	25～30 ページ
英語 (専門教科)	英語理解 (専門科目)	第2学年	横浜国際高等学校	31～36 ページ

コラム 「単元指導計画」について

本冊子の「第2章 言語活動の充実を図る実践事例」での「1 単元指導計画」は、神奈川県立総合教育センターが平成24年4月に発行した「高等学校初任者のための授業づくりガイド 平成24年度版」（以下「授業づくりガイド」という。）で提案している「単元構想シート」（pp. 35-36）の考え方にに基づき作成してあります。「単元構想シート」の考え方として「1 単元時間の授業を個々に切り分けて捉えるのではなく、単元（題材）全体としての流れの中で、それぞれの授業がどのような位置付けにあるべきか、という考え方をする」ことが記載されています。具体的な手順は右のとおりです。



また、この「授業づくりガイド」には、初任者だけでなく、経験年数の異なる教員にとっても、授業づくりに役立つ情報が掲載されています。この冊子は、神奈川県立総合教育センターのホームページからダウンロードすることができますので、参考にしてください。（なお、この冊子は、年度ごとに更新していく予定です。）

<http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/Snavi/kadaiSnavi/>

- 手順① 単元（題材）で身に付けさせたい力を明確にする。
- 手順② 目標が実現できた状態を想定し評価規準を設定する。
- 手順③ どのように実現していくか、1 単元時間ごとの評価規準を配置する。
- 手順④ 評価の方法を決める。
- 手順⑤ 評価規準を達成するための学習活動を定める。（「授業づくりガイド」 p. 36）

2

国語・現代文の実践事例

〔ステップ1〕 単元①における 課題と改善策

単元 「論旨を正確に読み取る」(3時間)
 教材 「メディアは何を変えるのか?—インターネットやケータイ」杉本 卓
 教科書「新編 現代文」pp.72~81(東京書籍)

概要

- 評論文に苦手意識を持つ生徒が多いことから、評論文の段落ごとの内容を説明し、理解させた上で、要約を行わせた。生徒の学習状況はおおむね満足できるものであった。

課題

- 生徒たちに文章全体の概要を把握させることが課題となった。
 生徒が細かい記述に左右されることなく、文章全体を大まかに捉えた上で、筆者の主張に当たる部分を捉えることは十分できなかった。
- 予習・授業・復習の学習習慣を身に付けさせることが課題となった。
 生徒に予習させて、授業内容をあらかじめ理解させた上で授業に臨ませることができなかった。

改善策

- 細かく読み取るのではなく、文章全体を大まかに捉えさせる。
 異なる視点から書かれた文章を教材として、対比されている二つの視点に着目させることで、文章の内容を大まかに把握させることができると考えた。
- 予習をさせるために、事前に課題を与え、取り組ませておく。
 二つの視点を意識しながら本文を授業時間外に読み、疑問点を明らかにした上で授業に臨ませるようにした。

〔ステップ2〕 単元②における 成果と課題及び改善策

単元 「論旨を的確に読み取り、自らの考えを深める」
 (6時間)
 教材 「環境問題への視点」中村 桂子
 教科書「新編 現代文」pp.45~52(東京書籍)

1 単元指導計画

	関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解	単元で身に付けさせたい力
単元の評価規準	語句や表現に注意して文脈を捉えた上で、書き手の考えなどに迫り、自分の考えを深めようとしている。	文章を的確に捉えた上で、自分の考えを深めたり、発展させたりしている。	語句の意味、用法を的確に理解している。	<ul style="list-style-type: none"> ・地球環境問題について二つの視点を捉え、それらの関係性について考える力 ・筆者の主張である、日常的な感覚こそが問題解決への鍵であるという視点を正確に本文中で捉え、要約する力 ・筆者の主張を的確に捉えた上で人間、社会、自然、そして「生きる」ことについて自ら考えを深める力

※ 表中の「関」＝関心・意欲・態度、「読」＝読む能力、「知」＝知識・理解

次	時	評価の観点			評価の方法	主たる活動	指導上の留意点・ポイント
		関	読	知			
1	1			○	行動の観察	○今日の環境問題とその解決策について、具体例を考える。 ○分からない語句の意味、用法を調べながら本文を通読する。	・文章全体を大まかに把握し、環境問題について二つの視点から書かれていることを確認させる。
2	2 3 4		○		記述の確認	○「科学的理解」と対比される「直感的理解」という視点の存在について確認する。 ○それぞれの視点がどの部分に当たるのか、本文に線を引いて確認をする。 ○本文の中で重要だと思われる部分を切り取り、それらをつなげて要約する。 ○筆者の意見に同調するか否かを考え、その理由を明らかにして、記述する。	・「科学的理解」と「生きものとしての理解」が一致する（DNA の例）ことが幸せな理解であり、その上で、「生きる」を基本に置いた行動が必要という筆者の主張を的確に捉えさせる。 ・接続詞に注意しながら、文章を一つにまとめさせる。
3	5 6	○	○		記述の分析	○教科書掲載以外の部分を読み、読み取った内容を記述する。 ○環境問題を「生命」、「生きること」を中心に考えるという筆者の意見を踏まえ、共通点や相違点を明らかにした上で、自分の意見をまとめて記述する。	・筆者の主張との共通点や相違点について考えさせ、環境問題はどのような視点から考えることが必要か、個人で考え記述させる。

2 本時の展開（本時は第2時）

【本時の目標】

- 「科学的理解」と「直観的理解」という二つの視点に着目し、本文の内容把握を行う。
- 二つの視点を踏まえ、筆者の主張を確認し、次時の要約につなげる。

分	学習活動	学習活動における評価規準	評価方法
20分	○グループで、本文を音読し、ワークシートの線を引かれた部分が「科学的理解」と「直観的理解」のどちらの視点に当たるかを判断し、二つの視点に分けた後、各段の主張はどの部分に当たるのか本文に線を引き、全体を大まかに把握する。	【読む能力】 筆者の主張を的確に捉えている。	記述の確認
10分	○グループで協議し、筆者の主張に当たる部分を確認し、ワークシートに線を引く。		
15分	○グループの代表が、黒板に貼った本文に、筆者の主張に当たる部分に線を引く。それぞれのグループの意見を見比べる。指名されたグループは、なぜその部分に線を引いたのか理由を述べる。		

3 言語活動の充実を図る指導の工夫

(1) 考えを持たせ、広げさせる工夫

◎ 考えさせる視点を与える

「科学的理解」と「直観的理解」という二つの視点に着目させた。二つの視点の展開に着目させ、対比させることによって、筆者がどちらの視点を重要視しているかを捉えさせることができると考えた。筆者の主張の要点を捉えさせることができれば、評論文に苦手意識を持つ生徒たちであっても、順を追って考えることで、内容を大まかに把握することができると考えた。

◎ グループワークにより、生徒に主体的に考えさせる

グループの人数を少人数にし、生徒が主体的に学習活動に取り組めるようにした。グループの人数を少なくすることによって、生徒全員がグループの中で意見交換できるようにした。

(2) 考えを深めさせる工夫

◎ 教科書以外の題材を与える

第5時において、教科書掲載以外の原文を読ませた。原文を読ませることによって、二つの視点についてはほかの文章と比較・検討ができ、本文の内容理解を深めさせる効果も期待できると考えた。

◎ 単元のまとめで生徒に自分の考えを表現させる

第6時において、筆者の主張を踏まえ、生徒の考えを記述させた。「読む能力」の単元における評価規準は、「文章を的確に捉えた上で、自分の考えを深めたり、発展させたりしている」であり、生徒に自らの考えを深めさせる言語活動を工夫することが重要だと考えた。

(3) 時間の確保

◎ 授業時間以外に取り組ませる

事前に本文のワークシートを渡しておき、「科学的理解」と「直観的理解」という二つの視点に着目させ、色分けさせることで、区別させるという課題を課した。これにより、グループワーク等を通じて、生徒に主体的に取り組ませる時間を十分確保できると考えた。

4 生徒の記述や発表

《第2時を踏まえ、第3時に行わせた要約を行ったグループの生徒の記述例》

第一段 地球温暖化について原因と結果が一对一の関係ではなく、複雑なシステムになっているので、地球温暖化の原因やどう対処しなければいけないのかということ、科学にこだわっている限り分らない。科学と科学技術による対応ではなく、生きものとしての人間の生き方の問題として考えなくてはいけない。一人ひとりの意識によって「生きる」を基本に置く価値観の社会が生まれる。

第二段 地球環境と同じで、人体も一つの原因で一つの結果が出るほど簡単なものではなく、重要なことは全体のバランスであり、幼い頃に養った生きものとしての感覚による判断があった上で、科学や技術を生かさなければ意味がない。「生きる」を基本に置いて考えなければ答えは出てこない。

第三段 科学的理解と直観的理解の一致は、幸せな理解だが、生きものは複雑なのでそれほど多くない。生命とは何かを科学的に理解し、生命を思うように操作できる状態を作り、危機を乗り越えるのではなく、常に生命について考え続けることによって、そこから分かることを大事にして危機から抜け出す道を探るほかない。

筆者の結論

「『生きる』を基本に置いた行動が必要である」という筆者の主張を正確に捉えている。

《第6時において、単元のまとめで筆者の主張を踏まえ、自分の意見を記述させた記述例》

筆者は、「生きる」を基本にして科学技術を使うという考え方で環境問題は対処できることを主張しています。

私はその意見に賛成です。なぜなら、最近の環境問題の原因は人間が欲望を満たすことだけを考えてきたことだと気付いたからです。今の地球には、いろいろな環境問題があつて、その問題一つひとつについて、解決策を探しています。しかし、その解決策にも問題があつて、終わりが無い、と思います。例えば、ガソリン車は環境に悪い、という問題では、水素自動車や電気自動車を普及させようという案があるようです。しかし、水素自動車は排出した水蒸気によって天候が変わる可能性があり、電気自動車は、発電によって発生する二酸化炭素が増加するなど、解決策にも問題があり、きりがありません。

私は、筆者のように、人間一人ひとりの考えを変えた方が良くと思います。しかし、それには時間が掛かりますから、それまで科学で問題の進行を食い止めるなど、やはり「生きる」の上に、科学を組み合わせた方が良くと思います。

単元の「読む能力」の評価規準の後半「自分の考えを深めたり、発展させたりしている」を達成するために、生徒に自分の考えを記述させる。



5 実践の成果

- 少人数（3～4人）のグループとすることで、ほぼ全員の生徒がグループワークに積極的に参加していた。
- 授業時間外に事前に次時の授業内容に関する課題に取り組みせ、生徒が授業内容についてある程度理解した上で、本時の授業を行ったことで、生徒により深く考えさせることができた。
- 本時の目標である二つの視点の区別や、筆者の主張の読み取りはできていた。また、次時に行われた本文全体の内容要約もおおむね満足できる状況であった。さらに、単元のまとめにおいて、筆者の主張を踏まえ、生徒が自分の考えを表現した記述内容もおおむね満足できる状況に達していた。

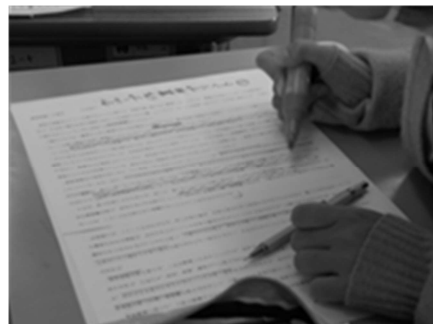
6 実践の課題と改善策

課題

- 本時において、グループワークの間、授業者の指示や説明を控えることは課題となった。
あるグループでの良い取組みを見つけると、授業者がクラス全体に説明していたが、これにより各グループの活動が止まった。グループワーク中の指示や説明をできるだけ控え、生徒に考えさせる時間を確保するとさらに良かった。
- グループの意見をいかにクラス全体で共有するかが課題となった。
今回は、模造紙に本文をコピーしたものに、線を引かせてグループの意見を共有させたが、グループで協議した内容をクラス全体で共有する方法を考える必要があった。

改善策

- グループワーク中は、教員の指示や説明を控え、生徒に考えさせる時間を確保する。
- グループの意見をクラス全体で分かりやすく共有するために、書画カメラ等 ICT 機器などの工夫をする。



[ステップ3] 年間指導計画作成の視点

◎ 繰り返すことで慣れさせる

1回目の単元においては、評論文に苦手意識を持つ生徒が多いことから、評論文を段落ごとに区切って、教科書の内容に沿って説明し、理解させた上で、要約を行わせた。時間を掛けて丁寧に指導したことによって、生徒の記述はおおむね満足できる状況であった。

しかし、文章全体を概観することに困難を感じている生徒が多く見受けられたので、2回目の単元では、環境問題を二つの視点から論じた、構成の分かりやすい文章を教材に選び、細かく読み取るのではなく、文章全体を大まかに捉えることを意識させることにした。キーワードを手掛かりにして対比されている二つの視点に着目させ、筆者の主張を読み取らせた。キーワードを追いながら読むことによって、生徒たちの要約はおおむね満足できる状況であった。

二つの単元では、論理的な文章を読んで論旨を読み取ることの指導を行った。生徒の実態を踏まえて1回目は細かく区切って、2回目は大まかに把握させて要約をさせたが、論理の展開をたどりながら筆者の主張を読み取ることは、論理的な文章を読む上での基本事項であり、重要事項でもある。それは、生徒自身の思考力を育てるばかりでなく、表現力を伸ばすことにもつながるからである。

このことから、年間指導計画を作成する際は、基礎的な事項についての繰り返しによる指導を徹底し、その指導で培われた能力が、次の指導では発展的に応用されるように、単元の構成を考える必要がある。

